

●マイハート		
◇芳醇にして人間味豊かな道徳教育	新宮弘識……	3
●教育のひろば		
◇かかわりを楽しもう。	東京おもちゃ美術館……	4
●連載／教育一語		
◇⑪見・視・観・察		
◇⑫人に忍びざるの心あり	新宮弘識……	6
●特集 Lesson on		
◇道徳の授業ピフォーアフター	小野勇一……	8
◇道徳の授業と各教科・領域をつなげてみよう	三浦貴子……	12
◇道徳の時間の中で情報モラルを考える	齊藤紀行……	16
●連載 体験を生かして		
◇クリーン活動が変わった	松田憲子……	20
●連載 人間関係づくりの演習と道徳		
◇「協力する活動」と道徳授業を組み合わせる	土田雄一……	21
●連載 授業参観におすすめの道徳授業		
◇中学年はやっぱり『自主・自立』	竹井秀文……	22
●連載／ひと味違った授業をするために		
◇道徳ノートの活用 パート2	加藤宣行……	26

本文中の勤務校は平成23年4月現在のものです。

新宮弘識先生▶東日本大震災に関して、被災者や日本内外の人々の行いや考え方や生き方に感動しています。詳細は、ネットの「日本道徳基礎教育学会」で述べています。

小野勇一先生▶昨年まで、大分大学附属小学校(8年間)に勤務していました。この間、大分県道徳研究会に在籍し、多くのことを経験させて頂きました。現在、教育事務所に勤務しております。管内の2小学校、1中学校が道徳の研究をしています。昨年までの経験を生かして、管内の道徳教育が進んでいくようがんばりたいと思います。

三浦貴子先生▶平成19年度に千葉県長期研修生として千葉大学大学院の上杉賢士教授にご指導いただき道徳教育について学びました。研究テーマは「人の生き方に学ぶ道徳の授業～学びの環境構成～」でした。現場に戻りこの4年間は、1年間のテーマを持ち、他教科・領域と関連づけたカリキュラムを作成し、日々道徳教育を楽しんでいます。

齊藤紀行先生▶今年は何かと当たり年のようです。「教職10年経験者研修」「東北地区小学校道徳教育研究大会の問題提起者」「郡の公開授業者(理科)」「小教研夏季研修会のパネラー(国語科)」……、忙しくも充実した毎日を過ごしています。

土田雄一先生▶10年ぶりに小学校現場に復帰です。子どもの声、笑顔が広がる学校はいいですね。初めての全校集会で大切な言葉として「いな運送」を紹介しました。日常生活に生きてはたらく言葉になってほしいと願っています。

松田憲子先生▶先日、あるコンサートで佐伯司朗氏の書に触れる機会がありました。その書の迫力に圧倒され、ただ眺めていました。理由などなく、ひたすら魅入られていました。言葉にはできない思いが渦巻きました。

竹井秀文先生▶私の故郷は博多です。今年も帰省しました。見慣れた風景、変わらない両親、友だち……。故郷の歌のように、わすれがたきものです。さあ、9月から故郷からもらったエネルギーでバリバリ働こうと思っています。

加藤宣行先生▶
筑波大学附属小学校教諭
淑徳大学講師
日本道徳基礎教育学会事務局長
使えるベーシック研究会常任理事
光文書院「ゆたかな心」編集委員



芳醇にして人間味豊かな道徳教育

淑徳大学名誉教授 新宮 弘識



「故きを温ねて新しきを知る」(論語)という言葉がある。故き(歴史)を温めて(炊き詰めて)いけばエキスが残り、それは、新しいことを考える上で役に立つという意である。

本号創刊100号を迎えて、創刊当時(36年前)の道徳教育の考え方を炊き詰めてエキスを取り出してみよう。今後の道徳教育の方向がみえてくるはずである。

- ・道徳は、片肘はった頑かたくなものとせず、芳醇にして人間味豊かなこくあるものでありたい。哀愁に浸る快感のようなこくあるものでありたい。(原富男)
- ・人間らしい感受性を文学作品で育てたい。「もののあはれ」を知らぬ人は人間ではないと決めつけた宜長は、いささか情緒主義に流れすぎという批判もあるが、有用性のための概念・判断・推理は人間らしい暖かい世界が欠落する。(井沢純)
- ・認識は行為の構造を表し、感情はそのエネルギー一面を示す。だから、努力すればわかる、わかればできるというわけにはいかない。従って感情教育が大切である。(波多野完治)

原は、中国思想の研究家であり、波多野は、心理学者であり、井沢は、文部省の教科調査官(道徳・文学者)である。三者の主張をみると、道徳教育に関する考え方に共通するエキスがあるように思われる。それも、哲学・心理学・文学に共通している。

そのエキスは、道徳的行為は「やむにやまれぬ

情に突き動かされて生まれる」ということである。道徳教育は、「いいなあ、すばらしいなあとする人間のよき心を醸成することが重要である」とする主張である。逆説すれば、なぜかという理(ことわり)だけでは、自分も人も動かないということである。理は不要であるということではない。大平正芳(元総理大臣)の言葉、「理を極め、情に居る」ということであろう。

このエキスをもって、現代の道徳教育をみてみよう。

三者の主張する人間のもととしての「情に居る」教育が低調であるように思われる。

道徳の時間においては、なぜかという理をいじり回してしてはいないか。もっと子どもの心の底の底にあるやむにやまれぬ心を躍動させる教育が大切ではないか。このままでは、ディベートに長けた子どもを育てかねない。

ところで、36年も前に主張されたことが、何故、実現されないのであろうか。

医学会のめざましい進歩に比較して、教育界の進歩が何と遅いことか。医学に比較して教育界は、目に見えないものの育成を主にしており、その教育は、時間を要するという特性があることは否定できないが、それにしても、36年を経過しているのである。

三者の主張は、道徳教育の「もと」に関するものであるが、このような「もと」を究めるよりも、明日の授業をどう展開するかという授業のマニュアルを求める傾向の強い教育界の風潮もその一因であるように思われる。

「本立ちて、道生きず」(論語)、「教師よ哲学せよ」(有馬朗人)が脳裏をよぎる。

かかわりを楽しもう。

東京おもちゃ美術館



「あそぶ」「つくる」「であう」、おもちゃでつながるコミュニケーションを生み出す、そうしたコンセプトをもつ「東京おもちゃ美術館」。東京都新宿区にあった、昭和10年に建

設された四谷第四小学校の跡地を利用した建物は、長い歴史の重みも感じられ、展示されているおもちゃたちをよりいっそう引き立たせているようだ。

この「東京おもちゃ美術館」の発足には、芸術教育研究所という民間の研究所が、研修で訪れたヨーロッパで出会った、当地のおもちゃの芸術性の高さへの驚きが、まずあった。同時に「子どもたちが最初に触れる芸術作品はおもちゃではないか」という思いの高まりがあったそうだ。そして、その思いが、26年ほど前に「おもちゃ美術館」として実を結んだ。

ここは、美術館といってもただ見学するだけの施設ではない。「あそぶ」「つくる」こともできる美術館なのである。スペース的な割合でいうと、触って楽しめる部分が7割を占めるという。子どもたちが夏休みの間は、長い行列ができるほどの人気コーナーもあるそうだ。

「あそぶ」から紹介しよう。「おもちゃのもり」にある「木の砂場」は、北海道産の木の玉が2万個も敷き詰められ、その上に乗ると非常に気持ちよく、ちょっとした森林浴気分を味わえる。大人はツボを押され気持ちよさを感じるの、ここでは保護者の方がかえって和んでしまうことも多いそうだ。とはいっても、和むのも束の間、あっという間に子どもたちに追いやられてしまうことに

なるようだが……。

「ゲームのへや」では、各国のアナログゲームが並ぶ。「どうぶつ将棋」「バックギャモン」「テーブルサッカー」など、それぞれのゲームの達人たちがインストラクターとしてゲームを教えてくれることもある。一流の技による、一流の楽しみ方が学べる場だ。達人は棋士や世界チャンピオンなど、それぞれ世界大会やワールドカップなどで活躍している実力者で、子どもたちが圧倒されるホンモノの技が見られる貴重な時間となるはずだ。



さて、「木育」という言葉をご存じだろうか。「東京おもちゃ美術館」では、地元でとれた木材を用い、地元の職人がおもちゃを作り、そのおもちゃで地元の子どもたちが遊ぶ、という「おもちゃの地産地消」を提唱している。木のおもちゃの温かみや安全性はよく知られているが、ここではさらに先へ踏み込んだ活動をしているのだ。

また、さまざまなワークショップも行われている。コンセプトの一つ「つくる」の部分だ。その中心、「おもちゃこうぼう」は元家庭科室。今ものづくりの場として活躍している。ここで、20～30分くらいで作れる、おもちゃの作り方を教えてくれる。作るものは、材料も手に入れやすく、作り方も簡単なものばかり。家に帰っても、子ど



もたちが、また作ることができるようにとの考えだ。子どもたちは、各自が自分でアレンジをすることができ、創意工夫の気持ちが刺激されることがだろう。また、自分で作ったものは、ちょっとしたことなら、自分で直すこともできる。自分で作り、直しもすることで、物を大事にする心も養われていくのだ。

「サイエンストイ」といった、科学的理論を利用したおもちゃものパフォーマンスも人気を呼んでいる。構造が複雑ではないおもちゃは、その仕組みが透けてよく見える。おもちゃの中身がよく分かり「自分でも作れる！」そういう気持ちが科学への興味を引き起こすのである。アメリカなどでは、科学者といったそれぞれの分野の専門家が、積極的にももちゃ作りに関わることも多いそうだ。本格的な理論を、おもちゃで触れさせていく、そういった経験を通し子どもたちを育てていく重要性を強く認識しているためだという。

ボランティアのおもちゃ学芸員（美術館内で赤いエプロンを着用されている）たちによるおもちゃのパフォーマンスも好評だ。登録されている方は18歳～86歳までおり、最高齢は小学校の元校長先生。現役を退かれても、子どもたちと触れ合う機会を求め、子どもたちを楽しませることが、生きがいとなっているそうだ。小学校の団体での手



作り教室も受け付けており、こちらも好評とのことである。

被災地支援にも動き、メーカーの協力も得て1万個以上のおもちゃを集めた。震災後間もない時期、プレイコーナーのセットを避難所へ直接届け、避難所の一角から、子どもたちの笑顔をやみがえらせた。そのよみがえった笑顔は人の輪をひろげた。避難所を管理していたおじさんが「何十年ぶりに……」と竹とんぼをあつという間に作り上げ、子どもたちを感嘆させた。避難していたおばあちゃんは、お手玉で子どもたちが遊ぶ姿を見て、自分もお手玉を作りたいと言ってきた。東京に戻り、お手玉作りの一式を送ったところ、間もなく今度はおばあちゃんから「東京の子どもたちに遊んでほしい」と届けた材料の分きっちりの、お手玉が送られてきたそうだ。

この美術館には、現役の小学校の先生もよく訪れるという。ボードゲームやテーブルゲームから得たアイデアを、班づくりに生かしているのだそうだ。ゲームを利用して、コミュニケーション力や話し合う力、お互いを尊重する雰囲気を高めることに活用しているのだ。

「もっと遊び、多くの遊びにチャレンジしてほしい。」それが「東京おもちゃ美術館」からのメッセージだ。子どもたちの生活の近くにある遊び。「おもちゃはコミュニケーションの潤滑油」であり、「社会性を育てる重要なツール」だと言う。ゲームにはルールがあり、順番も守らなければならない。お互いに話しながら進めていかなければならない遊びも多い。いろいろなゲームで遊び、声を出して表現する力もはぐくみながら、「かかわりを楽しみ子どもたち」へと成長していく姿を、東京おもちゃ美術館は期待している。

東京おもちゃ美術館

認定NPO法人日本グッド・トイ委員会が運営する美術館。東京中野の地で「おもちゃ美術館」として1984年に開館。2008年に現在地（旧四谷第四小学校）へ移転し「東京おもちゃ美術館」と改称。おもちゃを通じて「赤ちゃんからお年寄りまで」楽しむことのできるミュージアム。11月5・6日には「東京おもちゃまつり」を開催予定。

東京都新宿区四谷4-20四谷ひろば内

<http://goodtoy.org/ttm/>

見・視・観・察

—子どもをみる目の深さによって教育は大きく変わる—

淑徳大学名誉教授

『論語』に「その以^{もち}いるところを視、その由るところを観、その安んずるところを察れば、人いづくんぞかくさんや」（為政第二）という章がみえる。標題は、この中の視・観・察を抜き出したものであるが、論語には、「見」という字はない。「見」は原富男（中国思想の研究家）が、視・観・察に新しく加えたものである。

見・視・観・察は、人をみる目の深さについて述べており、何をしたかという表面だけでなく、その行為を生んだ理由や安んずるところまでもみれば、人は隠そうとしても隠しようがないといっている。ここではこのことを、子どもをみる目の深さに置き換えて考えてみよう。

見－何の観点もなく、子どもをぼんやりと見る段階。

視－何をしたか何をしなかったかと、子どもの言動を視る段階。

観－何故そうしたか何故そうしなかったかと、子どもの言動を生んだ理由を観る段階。

察－安んずるところは何かと、子どもが最も落ち着き楽しむところを察る段階。

の四段階であり、親や教師は、子どもの目に見える行為だけでなく、目に見えない心までみるように努めることが重要であると述べているといえよう。

それは、子どもをみる目の浅さ深さによって教育も大きく変わるからである。それを例示してみよう。

第一段階の見－何の観点もなく子どもをぼんやり見る段階における教育は、教育者に子どもの心や行為が的確にみえていないわけであるから、そこから生まれる教育は、子ども不在の教師中心の教育になろう。

第二段階の視－「うそをついたからよくない」「ガ

ラスをわったからよくない」というように、子どもの行為やその結果を問題にし、その言動をどうするかという教育になろう。

第三段階の観－そのような行為をとったのは、「何かあったにちがいない」「どうして、そうしたのだろうか」と、子どもの言動を生んだ理由や動機をみるわけであるから、子どもの心に立った教育が展開されよう。

第四段階の察－子どもの心の底の底を動かす、魂の教育が可能になるであろう。

このように子どもをみる目の深さは、教育を左右するのであるが、見・視・観・察は、「自分は、子どもをどこまで深くみているであろうか」と自問を迫られる一語である。

人間の心の理解は難しい。親は、わが子は親の心がわかっていないと嘆くのに、自分は子どもの心が理解できているかと改めて自分に問いかけたとき、よくわかってはいないことに気付き愕然となる。

子どもをよく知っているのは教師であると、自負しているものの、担任している一人ひとりの子どものよさを挙げてみよといわれて、全員の子どものよさを挙げることはなかなかできない。

先ずは、子ども達と遊び、話し合い・日記・手紙のやりとり等による子どもとの交流の機会を広げることが大切であろう。また、行為から心へというように、子どもの心の奥までみようと努力することが重要であろう。

このようにして子ども理解がなされたら、それを医師のカルテのように、一人ひとりの子どもについて克明に記録しておきたいものである。

教育は、真の子ども理解なしには成立しないのである。

人に忍びざるの心あり

—子どもは人間のよさを求める心をもっていると信じて、それを伸ばそう—

新宮 弘識

「人に忍びざるの心あり」は、『孟子』にみえる孟子の言葉である。

人間には、他者の不幸や苦痛をだまって見過ごすことのできない心があり、そういう心がない人は、人間ではないという意味である。東日本大震災では多くの人々が心を痛めた。これはまさしく「人に忍びざるの心あり」であり、日本は未だ大丈夫だと思ったのは私だけではあるまい。

『孟子』では、「忍びざるの心」以外に「恥にくむ心」「辞り譲る心」「是非の心」を挙げて、これらも人間の心こころであり、それは、人間の身体からだのように、必ず具わっているものであるといっている。

このことについて、面白い話がある。孟子の「牛山の樹」の譬えである。

牛山は中国の山であるが、孟子の頃はこの山が禿げ山であった。この山について孟子はいう。昔は樹が生い茂っている美しい山であったが、乱伐のためにあのような禿げ山になってしまった。人々はこの禿げ山をみて、昔から樹がなかったという。然し、山には樹があるもので、樹を茂らせるのは「山の性」にほかならない。人間も牛山と同様に、四つの善い心を生まれながらにもっているのにそれをみようとしないと説いている。

荀子の性悪説に対して、孟子は性善説を説いたわけである。

この孟子の人間論は、教育一語⑪で述べた、子どもをみる目と深く関係している。

親や教師は、子どもに完全を期待して、子どもの欠点・問題点を指摘し、それを何とかして補ってやろうとする。それが進学に関わってくると尚更である。子どもの人間性をみる目も同様に完全から子どもをみようとする。子どもがもっている人間のよさよりも、欠点や問題点に着目し、それを改めさせようとするのである。牛山の譬えのように、子どもの問題点だけをみて、どんな子どもでも人間のよさを求める心をもっていることを見

落としてしまうのである。

他者の欠点あげつらを論う現代の風潮も、このような子ども観に拍車をかけているように思われる。

30才代の私もそうであった。担任している子どもの問題点や欠点に着目して、それを完全に向かって教育しようとした。子どもの可能性をみてそれを伸ばすことを疎かにしていたのである。それが40才の後半になって一年生を担当したとき、芭蕉の「人の短を語る事なかれ。己の長を語る事なかれ」の一句を思い出し、自分の子どもをみる目の転換の重要性を痛感したのである。

医者は、人の病に着目してそれを治癒し、健康な体にしようと努めるのに対して、教師は、人間の善さに着目して、それを伸ばそうと努めることが大切ではないかと考えたのである。

子どもでも、悪しき心・醜みにくき心をもっているのであるが、教師は、子どものもっている善き心・美しき心に注目し、性善説に立つことを基本とすべきではないかと考えたのである。

このような子ども観・教育観を私は標記のように「子どもは人間のよさを求める心をもっていると信じて、それを伸ばそう」と表現したわけである。

ここで問題になるのは、「どう伸ばすか」である。このことについて五つの提案をしておきたい。

- ①、一人ひとりの子どもの人間のよさをしっかりとみて、それを記録する。
- ②、資料や子どもの生き方にみえる人間のよさを取り上げて、その素晴らしさをわからせる。
- ③、資料や子どもの生き方にみえる人間のよさを取り上げて、その素晴らしさに感動させる。
- ④、人間のよさは、自分ももっていることを自覚させる。
- ⑤、人間のよさが発揮できる場を構成し、人間のよさを継続的に躍動させる。

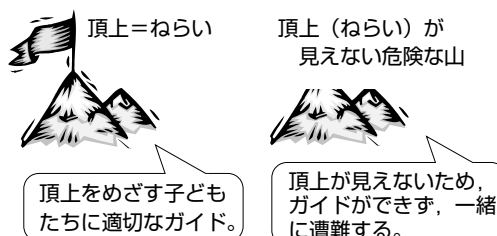
道徳の授業ビフォーアフター

大分県教育庁竹田教育事務所指導主事 小野 勇一

1 はじめに

道徳の授業では、子どもがもっている道徳的見方・考え方・感じ方をほんのわずかでも、よりよい方向に向けてやるのが大切である。そのためには、「授業のねらい」が明確でなければならない。

授業を「登山」に例えてみる。



うまくいかなかった授業は、右側の図のように、教師が「ねらい」をとらえ違えたり、明確でなかったりする場合が多いのではないだろうか。「ねらい」がぼやけると、授業全体がぼやけてしまい、子どもにとっても教師にとってもよく分からない授業になってしまう。

2 道徳の授業における「ビフォー」

(1) 授業の「ねらい」を明確にする

ポイント

- ① 指導要領解説で指導内容を確認する！
- ② 指導内容に関する児童のこれまでの学びや体験を把握する！

まず、本時で指導する内容を学習指導要領解説「道徳編」をもとに理解する。ここには、誰もが理解しておくべき内容が示されている。また、教師用指導書がある場合は、この部分を読んでおくといよい。

次に、指導する内容項目に関わって、子どもたちがこれまで、どのような学びや体験をしてきたのか、またどのような状態にあるのか把握する。すると、望ましい傾向であるのかそうでないのか、

指導が充分なのか不十分なのか見えてくる。ここで、教師に見えてきたものが、内容項目に関わる子どもの実態である。

このような子どもの実態を踏まえ、授業の「ねらい」が決まる。



子どもの実態をとらえ、「ねらい」が決まったら、「資料選定」になります。紙面の都合により「資料選定」についての説明ははぶきます。

(2) 資料の分析を行う

ポイント

- ③ 子どもたちに一番考えさせたいのは、資料のどこか！
- ④ それを考えさせることが、「ねらい」と関連があるのか吟味する！

まず、本時で扱う資料をどのように活用し、子どもの道徳的見方・考え方・感じ方を深めていくのか決める。つまり、ねらいとする道徳的価値に関わって、本時でもっとも考えさせたい事柄を明らかにするのである。この事柄を含んだ場面が本時の学習の中心となる。

次に、学習の中心が「ねらい」と関連があるのか吟味する。中心の発問に対して、子どもからいくつかの考えが出てくる。それらの考えが、「ねらい」と関連があるのか検討する必要がある。

(3) 具体的な子どもの発言を想定する

ポイント

- ⑤ 「ねらい」に迫ったと考えられる子どもの発言を想定する！
- ⑥ 期待する姿から逆算して、手だてを考える！

子どもたちが、「ねらい」に迫ったかどうかを評価することは難しい。道徳は「心」の中を問題にしていけるが、人の「心」の中はのぞいて見ることとはできない。45分間の授業の中では、子どもの

発言内容やノート記述等で評価していくしかないと考える。

まず、中心の発問に対して、もっとも期待する発言を子どもの言葉で想定してみる。そして、そのような発言が子どもから生まれるには、どのような学習が必要なのか、またどのような場面を取り上げるのかを逆算して考え、具体的な手だてや展開を構想していくようにする。

こうして、学習の中心が明確な授業ができあがっていく。

3 「ビフォー」の具体例

これまで述べてきたことを、実践例をもとに説明していく。資料は「うさぎ(光文書院5年旧版)」である。

～資料「うさぎ」のあらすじ～

学級会で飼育委員を決める際、主人公は、岡田君を悪ふざけで推薦してしまう。

ところが岡田君はそんな主人公に対して、靴ひもがほどけていることを教えたり、自分のつらい思いを語ったりする。

主人公は、岡田君の本当の気持ちを知り、今までの自分の態度を反省していく。

(1)授業の「ねらい」を明確にする

① 指導要領解説で指導内容を確認

4-(2)

だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。

公正・公平にすると、偏ったものの見方・考え方を避け、私心にとらわれずだれにも分け隔てなく接することである。しかし、これを妨げるものに、差別や偏見がある。ここでは、身近な差別や偏見に気づき、不正や差別的な行為を絶対に許さないという態度や心情を育てたい。(学習指導要領解説を参考)



② 児童のこれまでの学びや体験

子どもたちは、ケンカが起きると、互いの気持ちを伝え合うという活動を経験してきている。そのような経験から、相手の気持ちを推し量る態度は育ちつつある。

しかし、クラス替えがあったばかりで、子どもたちの人間関係は十分にできていない。互いに偏見をもっていることも考えられる。そこで、差別的な言動の卑劣さやおかしさについて、じっくりと考えさせ、よりよい人間関係を構築する素地を育てていきたい。

「ねらい」を設定

差別や不公平のおかしさ、卑劣さがわかり、差別や不公平を許さない心情を育てる。

※ここでの「ねらい」は向上目標であり、このような心情は1時間で育つものではない。よって、授業の「アフター」も大切になる。

(2)資料「うさぎ」の分析を行う

ねらいを設定したところで、資料「うさぎ」のどこを学習の中心にするのか検討する。

③ 考えさせたいのは、資料のどこか

主人公が心の底からあやまりたいと思うようになったのはなぜだろう？

ここを学習の中心にすれば、下のような多様な考えも期待できる。

ア：岡田君のよさを知ったから

イ：岡田君のつらさを知って同情したから

ウ：自分のしたことを深く反省したから

また、アとイを踏まえた上でウの考えに子どもたちが気づけば、差別や不公平のおかしさや卑劣さを感じ、それを許さない心情や態度につながる。

④ 「ねらい」と関連があるのか

(3)具体的な子どもの発言を想定する

この授業では、次のような発言(考え)を期待したい。

⑤ 「ねらい」に迫った子どもの発言を想定

岡田君の気持ちも考えずに推薦してしまった自分は「ひきょうものだ」と深く反省しているからだ。

このように発言する子どもは、その発言の裏側で「気の弱い人に、いやなことをするのは、ひきょうだ。主人公がしたことは絶対に許されない」等と感じているだろう。このような感情が、差別や不公平を許さない態度や心情につながる。

⑥ 期待する姿から逆算して、手だてを考える

主な手だては、岡田君の気持ちを話題にしながら、主人公の心の中を探らせることである。具体的には、「うさぎってほんとに似てる」「なけないからかわいそう」等の岡田君の言葉を取り上げ、岡田君の置かれているつらい立場をとらえさせる。そして、そんな岡田君に対する悪ふざけが、どれほど卑劣なものかを子どもに気づかせたい。

(4) 授業展開の例

このような教材研究（ビフォー）を経て、授業展開の一例ができた。

(前省略)

○主人公が、岡田君を推薦したことをどう思いますか？

- ・ ひきょうだ ・ いいかげんだ ・ 無責任だ
- ・ 岡田君を馬鹿にしている

(その後、主人公の心の変容を話題にしていく)

◎主人公が心の底からあやまりたいと思うようになったのはなぜだろう？

- ア：岡田君のよさを知ったから
- イ：岡田君のつらさを知って同情したから
- ウ：自分のしたことを深く反省したから

(イの考えを取り上げ、岡田君のつらさに着目させていく。)

T 主人公は、岡田君のつらさを、本当にわかったのかな？

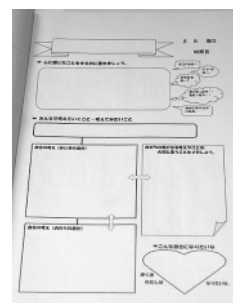
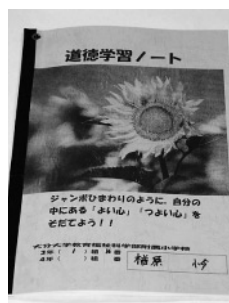
- ・ わかったと思う。なぜなら、岡田君の話を聞いた後、涙がこぼれそうになっているから。
 - ・ 岡田君も主人公にわかってほしいから、自分の弱さを伝えたんだ
- (子どもたちが、岡田君のつらさを感じる状況になったら、次の発問にうつる)

○主人公が心の底からあやまりたいのは、岡田君のつらさがわかったからだろうか？

- ・ 岡田君の気持ちも考えず、嫌な仕事を押しつけた自分のずるさを反省したのかな。
- ・ 遊び半分で推薦したことが、こんなに人を傷つけるのだと気づいたのかな。

(後省略)

4 道徳の授業における「アフター」の具体例 例1：道徳学習ノートを使って、声援を送る

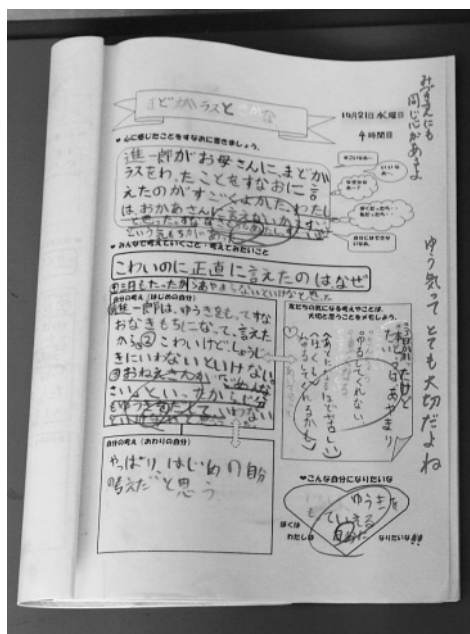


担任自作の「道徳学習ノート」を使っている実践例である。

学級の中には、発言することで自分の考えを確かにしたり深めたりする子どももいれば、書くことによって学びの成果を高める子どももいる。45分の授業では、学級のすべての子どもが発言できるとは限らない。その時間に発言せずとも、心を動かし、深く考えている子どもは必ずいる。

授業の後、下の写真のように子どもの考えに対して、「Aさんにもきっと同じ心があるよ」「～って、とても大切だね。」等のコメントを書き加えていく。これを読んだ子どもは、自分の心の中に、よりよく生きる「種」を育てていこう。

「道徳学習ノート」には、授業後においても、子どもたちの考えを受け止め、応援していきたいという担任の思いが込められている。



例2：学びの足あとをのこす教室掲示

教科では、学習のまとめや大切な事柄を教室内に掲示することがよくある。道徳の授業においても、学びの足あとを残すような取り組みがあってもよいだろう。

下の写真は、ハート形の紙に、子どもとともに話し合った内容を端的に示し掲示している。1時間の授業の度に、1枚ずつ増えていく。子どもたちにとっては、だんだんと自分の心が成長しているように感じるだろう。また、重点的に指導する内容については、別の資料で学習したことと関連させながら、統合的に授業を展開することもできる。

まさに道徳教育を学級経営の柱にした取り組みである。



例3：授業参観の後、家庭の中で

この実践例は、家族参観日で行ったものである。授業で扱った資料は、光文書院4年の資料「ぼくの生まれた日」である。

～資料「ぼくの生まれた日」のあらすじ～

パパとママにきびしく叱られたのび太は、自分は本当の子ではないと思い込む。それを確かめるために、タイムマシンに乗り、自分が生まれた日に向かう。

自分が生まれた日、パパとママの様子を見たのび太は、2人の期待にこたえようと心を入れ替える。

この資料には、名前の由来や両親の願いが描かれている。日頃の生活では気づきにくい親の深い愛情に気づかせることができる。

家族参観日に合わせて、この授業を行うことは、それぞれの家庭で授業の続きとも言える団らんのきっかけが期待できる。「自分が生まれた日」の話聞いた子どもは、さらに家族の大きな願いや愛情を感じるだろう。

例4：読書活動につなげる

光文書院「ゆたかな心」の中には、実際の人物を扱った資料や小説から作られた資料等がある。例えば、「ガンジーのいかり（5年）」を使った授業であれば、終わりにガンジーに関する本を紹介すれば、それを読もうとする子どももいるだろう。学習の後だからこそ、興味をもって読書活動が行える。子どもの心にさらに響く内容もあるだろう。

5 おわりに

今回の学習指導要領には、家庭や地域に対して、「道徳の時間を公開する」ことが記述されている。

私は、この授業公開を「家庭や地域」だけでなく、教員相互で平素より行うべきだと考える。私は学校現場にいた頃、数名の教師と「互見授業」と称して授業を見合っていた。この経験が多くの事を教えてくれた。互見授業には次のようなルールを決め、取り組んでいた。

ルール1：授業のねらいを明確にし、具体的な子どもの発言を想定すること。

ルール2：必ず、授業記録をとること。

ルール3：放課後、30分程度、論議すること。

ルール1は、授業者の事前の準備であり、もっとも大切な営みと考える。本稿の「ビフォー」にあたる部分である。また、ルール2・3は、授業力を高めていくために、教師にとって大切な「アフター」だと言える。

このような「ビフォー」と「アフター」を積み重ねることで、「授業の匠」に近づいていくのではないだろうか。

「道徳の授業と各教科・領域をつなげてみよう」

～合科的に扱う良さを生かして～

千葉県富津市立大貫小学校教諭 三浦 貴子

はじめに

小学校学習指導要領「第1章 総則」の「第1教育過程編成の一般方針」の2 前段 より

学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。（～線は執筆者以下同）

小学校学習指導要領解説道徳編「第2章 道徳の目標」の「第1節 道徳教育と道徳の時間」より

道徳教育は、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて行うとともに、あらゆる教育活動を通じて、適切に行われなくてはならない。その中で、道徳の時間は、後述するように各活動における道徳教育の「要」として、それを補充し、深化し、統合する役割を果たす。いわば、扇の要のように道徳教育の要所を押さえて中心で留めるような役割をもつといえる。したがって、各教育活動での道徳教育がその特質に応じて効果的に推進され、相互に関連が図られるとともに、道徳の時間において、各教育活動での道徳教育が調和的に生かされ、道徳の時間としての特質が押さえられた学習が計画的、発展的に行われることによって、児童の道徳性は一層豊かにはぐくまれていく。

上記の記述にあるように道徳の時間のみならず、他教科・領域との関連を図ることでさらに道徳の時間で扱う内容項目（道徳的価値）の習得が深ま

り、児童・生徒の道徳性を発展させ、自己の生き方の基盤づくりができると考える。そこで、「道徳の授業と各教科・領域をつなげてみよう」～合科的に扱う良さを生かして～ の実践をいくつか紹介していきたい。

1 道徳の授業を合科的に扱う良さ

総合単元的な道徳学習という言葉を目にすることがあると思うが、これは、特定の道徳的価値に関する学習を道徳の時間だけでなく、関連する教育活動や日常生活にもかかわりをもたせて、それらを総合単元的に計画し道徳学習を行うことである。

道徳で学んだ内容を図工・音楽・体育で表現していくことで各教科の力（学力）とかわりをもたせて、自分の道徳性を試す場とすることもできる。その逆で他教科・領域で培った知識や技能や体験を道徳で取り上げ、その内容の心情の部分に迫っていく、道徳性を深めていくこともできる。単発的な道徳の授業ではなく、他教科・領域とかわりをもたせることでより児童・生徒の心を動かすことができる。

また、総合的な学習の時間の中で、子どもが一つの課題を解決し、主体的に対象に働き掛けていく学び方は、教科等を統合した学習によって展開される。そして、そこで得た知識や概念は、一つの領域だけからでは得られぬ子どものニーズに対応したものとなる。

道徳の時間を中心とした統合を図り、教科で学習した知識と概念や特別活動での活動性を関連づけければ、より効果的に児童・生徒自身が道徳的価値の自覚及び、自己の生き方についての考えを深め発展させていくことができる。

2 科学的に進めるポイント

①一年間のテーマをもつ

テーマづくりのポイント

学校教育目標の具現化と学級経営に役立てる

- ・学校、学級目標に迫る
 - こんな学校・学級にしたい
- ・学級の問題に迫る
 - こんな子にしたい、早期発見・早期解決
- ・良さを伸ばす
 - 個性伸長、学級力向上

②多種多様な道徳の資料開発

資料づくりのポイント

心に響く学習や体験を道徳に生かす

- ・国語「物語」「俳句、川柳」「作文」
「昆虫の観察文」「詩」
- ・社会「市、県の特徴調べ」「先人の働き」
「農家の人々」「工業の発展」「歴史」
「世界の国々」
- ・理科「昆虫の観察」「命の誕生」「植物の成長」
「発明家たちの研究」
- ・音楽「音楽家たちの歩み」「合奏・合唱」
- ・図工「物語絵」「日常絵」
「自分を花にたとえると」「心の色」
「ポスター」「造形遊び」「看板づくり」
- ・体育「運動会」「リレー大会」「マラソン大会」
「縄跳び大会」「球技大会」
- ・特別活動
「集会活動」「クラブ」「縦割り班活動」
- ・総合的な学習の時間
「ボランティア活動」
「ぼくらの町の名人探し」
「心のバリアフリーを求めて」
「命の輝き～命は自分の持ち時間～」

上記は、道徳と関連づけて私が資料化したものである。学校によって、特色ある教育活動や体験活動があると思うが、それらを学校のオリジナル資料にすると毎年活用できる。また、タイムリーであり、児童・生徒の興味関心が高まる。さらに、毎年行っている行事を資料化すると次の年に心情面からアプローチすることもできる。

③ゲストティーチャーの活用

ゲストティーチャーの活用ポイント

教科・領域でお迎えするゲストティーチャーのリストを作成する

*年間計画に位置づけ依頼計画を立てると良い。

☆ゲストティーチャーの人材リスト

ジャンル	氏名	内容
平和教育	平野さん	戦争体験
平和教育	小坂洋子 校長先生	父の戦争体験
平和教育	小泉さん	戦争体験
ボランティア	山田 誠 さん	消防士の仕事・子供会 ジュニアリーダー
自然	永井さん	御不動様の水を守る
親の思い	角田さん 松本さん 茂木さん 林 さん 錦織さん	卒業する我が子へ あなたを生んで良かった 我が子への願い 我が子へありがとう 悩みを打ち明けて
祖父母の 思い	岩澤さん 牧野さん	孫へ 手紙
農業	小柴さん	椎茸栽培の夢
伝統の味	鈴出さん	太巻き寿司へ込めた愛情
大わらじ	前沢さん	伝統文化を受け継ぐ
野生動物 と共存	牧野さん	農家の被害と動物の命
祭り	川崎さん	地域の活性化

生の声を聞くことは、印象的かつ

心にストレートに響くものである

地域の人々は、実に様々な経験をして多様な思いで生きている。大変魅力的な方々が大勢いる。生き方の人生モデルとして素晴らしい教材になる。その方たちとの出会いを仕組み、授業の中で大いに話を聞いたり、ふれあったり、体験したりするとよい。それは、児童・生徒の心に響き、いつまでも残るものである。私は、道徳の授業の中で、ゲストティーチャーを活用することが多い。その内容を他教科・領域と関連づけると、他教科・領域の学習も深まっていくことがある。

3 合科的な授業実践

☆小学校低学年の実践

テーマ「人間関係づくり～みんなみんな大好き～」

1 学期 友だちは いいもんだ	2 学期 家族は いいもんだ	3 学期 みんな ありがとう
道：コミュニケーションの取り方 生：友だちとふれあう（探検活動） 国：友だち作文を書く 道：友だちの良いところを見つける 生：大貫海岸での造形遊び	生：誕生秘話調べ 生：思い出アルバムづくり 国：思い出作文を書く 道：『命の誕生』家族の思い 生：家族へ感謝の手紙を書いて渡す DVD 1 作成 ……家族の思い	生：自分の成長を振り返る 国：成長した自分への手紙を書く 道：支えてくれた家族や仲間への感謝の気持ちを表す 生：感謝パーティー開催 DVD 2 作成 ……友だちに感謝

『命の誕生』家族の思いを知る

1. 主題名 「大切ないのち」

内容項目 3—(1) 生命尊重

資料名 誕生 そして 成長

(児童の思い出アルバムより)

いのちのまつり つながっている

草場 一壽 サンマーク出版

2. 本時の指導

(1) ねらい

お腹の中で赤ちゃんが育つ様子や誕生したときの様子を見聞きし、自分を大切に思ってくれている家族からの手紙を読むことを通して、生きていることを喜び、これからも生命を大切にしようとする気持ちを高めることができる。

学習活動と内容

1. 命について話し合う。

○命ってなんだと思いますか。

- ・ たからもの
- ・ 一つしかないもの
- ・ みんなが大切にしているもの

2. お腹の中の様子を知って感想を話し合う。

〈命のはじまり〉

○お腹の中に命が生まれた様子を見て、どんなことを感じましたか。

- ・ がんばって命をもらったんだね
- ・ お腹の中でどうやって大きくなっていくのかな

〈お腹の中での成長〉

○お腹の中で成長していく様子を見てどんなことを感じましたか。

- ・ お母さんから栄養をもらって生きている
- ・ お母さんに守られている
- ・ みんなが成長を喜んでいる

【保護者参加①】

お腹の中に我が子がいるときのお母さんの気持ちを聞く

3. 家族に取材して作った、生まれてからの自分の成長記録を見て、話し合う。

○命をもらってからの自分の成長を振り返って、どんなことを感じましたか。

- ・ 自分なりにがんばってきた
- ・ たくさん成長してうれしい
- ・ もうちょっとがんばった方がよかった
- ・ 命ってすごいな

【保護者参加②】

今までの成長を振り返っての感想や命に関するエピソードを聞く

4. 命をテーマにした家族からの手紙を読む。

○おうちの人からの手紙を読んで、どんな気持ちになりましたか。

- ・ 命を大切にしようと思った
- ・ ぼくを命がけて産んでくれたんだから、がんばって生きたい
- ・ こんなに大切に思ってくれてうれしい

○おうちの人に手紙の返事を書いて、伝えましょう。

☆手紙を書く。 ☆発表する。

(トーキングサークル)

*全員が語る。 全員で聞き合う。

- ・ いつも見守ってくれてありがとう
- ・ 命を大切にすね
- ・ お父さんもお母さんも長生きしてね

5. 担任からメッセージを聞く。

- ・ 命はつながっている(絵本活用)
- ・ むだな命は一つもない
- ・ あなたのかわりはいない
- ・ 生まれてきてくれてありがとう

(自作フォトムービー視聴)

☆小学校中学年の実践

テーマ「ふるさとっていいもんだ」

内容項目 4—(5) 郷土愛

社 会 (12時間)	富津市調べ ・地形 ・交通 ・特産 ・工業
総合的な 学習の時間 (4時間)	富津自慢調べ ・美味しいもの ・歴史 ・観光地 ・祭り ・伝統、文化
道 徳 (2時間)	ふるさと大好き ゲストティーチャーをお迎えして ①ふるさとの今と昔について ②ふるさとへの思いについて
国 語 (3時間)	ふるさとガイドブックづくり ・オリジナル地図づくり ・地域の人の思い ・私たちの思い

『ふるさと大好き』ゲストの思いを知る

【尾棹さんのお話】～今と昔～

私は生まれてからずっと大貫に住んでいます。海も山もあってとても自然が豊かです。お魚もお野菜も美味しいです。子どもの頃の祭りの思い出や友だちと遊び回った思い出がたくさんあります。とにかく、大貫の人はあったかいです。

だから、この大貫のよさや伝統・文化を守って受け継ぎ、次の世代の人たちに伝えていきたいと思っています。

【杉田さんのお話】～ふるさとへの思い～

私は大貫で生まれ育ちました。学生時代と結婚当初は、地元を離れていました。離れてみると、地元にいるときよりもっとふるさと大貫が愛おしく大切なものだ気づきました。今は再び大貫の地に戻り、ふるさとの暮らしを楽しんでいます。地元の民話を子どもさんたちに語り継いだり、祭り行事に参加したりしています。みんなも大貫をもっと知ってくださいね。

☆小学校高学年の実践

テーマ「命あるかぎり～強く生きる～」

総合単元的道徳の授業プログラム 「命あるかぎり～強く生きる～」

ステップ	活 動	内 容	領域	時間
① モデルの発見 児童がなりたいたい自分に近づけるために参考となる人生モデルを見つける。	オリエンテーション 道徳とは何だろう	心の勉強、語り合うことが大切。そんな仲間になろう。	学活	1
	命について 生き方の心のコンパス なりたいたい自分	命は自分の持ち時間。生き方が大事。生き方の心のコンパスを見つける。	総合	2
	人生モデル調査	人生モデルを見つける。	総合	夏休み
② モデルへの アプローチ 総合では、生き方の「人生モデル」にしたい人の調査や取材活動を進めていく。道徳では、人生モデルを児童と共に資料化して授業展開をする。道徳の授業の中で、友だちの「人生モデル」にふれ、さらに生き方を学んでいく。	人生モデル調査	人生モデルの調査をする。	総合	3
	人生モデル調査報告会 グループ編成	各自、人生モデルを紹介する。同じ目的別にグループ編成をする。	総合	2
	人生モデル資料づくり	道徳授業の準備をする。	総合	3
	人の生き方に学ぶ①	宮沢賢治さんの生き方	道徳	1
	人の生き方に学ぶ②	石井裕也投手の生き方	道徳	1
	人の生き方に学ぶ③	エレナ・シムバエワ選手と竹下佳江選手の生き方	道徳	1
	人の生き方に学ぶ④	山田 誠さんの生き方	道徳	1
③ モデルの共有 通信やワークシートメッセージ・親子学習会により、親子で「人生モデル」を共有する。	人の生き方に学ぶ⑤	大野勝彦さんの生き方	道徳	1
	人の生き方に学ぶ⑥	家族の生き方	道徳	1
	人の生き方に学ぶ⑦	生き方について親子トークをする。家族からの手紙。	道徳	1
	発表会 「命あるかぎり～強く生きる～」	各自、今の思いと今後の目標を語る。人生モデルに手紙をかく。	総合	2

その他にも

○テーマ「強い心をめざして」では、毎月1回の学年集会で、オリンピック選手や身近な人たちの生き方を資料として【あきらめない心】をキーワードにその生き様から学ぶ。

○テーマ「心のバリアフリーをめざして」では、年間6回の体験活動を取り入れ、障害をもっている方やお年寄りの方、盲導犬とのふれあいや、どのようにかわったら良いのか考える。

「道徳を生かす」「道徳でつなぐ」
ぜひ実践してください

道徳の時間の中で情報モラルを考える ～チェーンメールを通して考える「思いやり」～

青森県三沢市立岡三沢小学校教諭 齋藤 紀行

1 はじめに

今年度から道徳の新学習指導要領が完全実施となり、新しく「情報モラルの問題に留意した指導」が加わった。そこで、情報化の影の部分に道徳指導を通して何らかの働きかけをしようと思い、自分なりに解釈し、授業してみたものを紹介したい。なお、授業実践は平成21年度に前任校で行ったものをここでは取り上げる。

2 指導要領解説では…

『小学校学習指導要領解説』（平成20年8月）より

第5章第4節の「5 情報モラルの問題に留意した指導」（P94）を簡単にまとめると以下のようになる。

- ・情報モラルの指導は、（本来、教育活動全体で行うものであるが）道徳の時間の中でも配慮していかななくてはならない。
- ・情報モラルとは情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度で、その内容は、個人情報保護、人権侵害、著作権などに対する対応、危険回避やネットワーク上のルール、マナーなど多岐にわたる。
- ・道徳の時間では、例えば、情報モラルに関する題材を生かしたり、情報機器のある環境を生かしたりするなどして指導に留意する。
- ・情報モラルの指導は、様々な題材を扱って良いが、問題の根底にある他者への共感や思いやり、法やきまりのもつ意味など道徳的価値についての考えを深められるようにする。
- ・情報モラルの指導は、単に技術的な練習の時間にしてはいけない。

つまり、

道徳の時間で行う情報モラルの指導は、

「情報の諸問題」を普段の道徳の時間で扱う題材（資料等）として扱えばよい。

と解釈して授業を行うことにした。

3 授業の実際

（1）実践校の紹介

実践した学校は、平成21年度当時の赴任校であり、自然が豊富で海と山に囲まれる小規模校である。児童数は約70名で、授業は5年生12名（男子4名、女子8名）に行った。なお、携帯電話を保持している児童は1名、パソコン等で自由にインターネットを見ることができ環境にある児童は4名であった。本時では「チェーンメール」について扱ったが、ほぼ全員がチェーンメールとは何かも知らない児童ばかりであった。

（2）題材名、中心価値

チェーンメールから考える思いやり 2-（2）

（3）ねらい

実際にあったチェーンメールの事例を基に情報モラルについて考えるとともに、その根底にある他を思いやる気持ちについて考えることができる。



(4) 提案

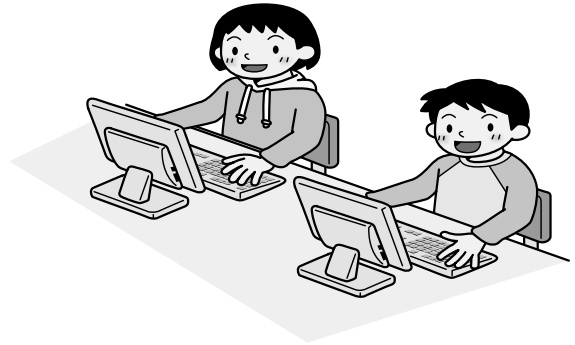
- 情報モラルの指導方法
- 話し合いの仕方～ウェビング図を使用
- 『子どもの道徳 No. 93』土田雄一先生の「ウェビングで多角的に考える力を育てる」を参考にした。

(5) 本時の展開

- ①思いやりとはどういうことか発表する。
- ②チェーンメール A を読んで考え、話し合う。
 - ・メールを送るか送らないか、両方の立場で意見や考えをワークシートに書いていく。
 - ・自分だったらどう行動するかを選んで理由を書く。
 - ・みんなで話し合う。
 - ※黒板に自分の名前を書いたマグネットを貼って話し合う。
 - ・友達の見解で良いと思ったところを発表する。
 - ・最後に自分の判断を決める。
 - その行動をした後の気持ちも考え、書いておく。
 - ※話し合いでは、以前学習した「思いやり」について振り返らせるようにする。
- ③チェーンメールについての説明を聞く。
 - ・嫌な思いの連鎖
 - ・被害者が加害者に
- ④チェーンメール B を読んで考える。
 - ・5人に送るかどうか
 - ・この事例の結末を聞く
 - いたずら→事件に発展
- ⑤「思いやり」という言葉を入れて、今日の感想を書く。

⑥インターネット上のトラブルについて話題を聞く。

- ・掲示板を巡って起こった殺人事件など



チェーンメール A

あて先	齋藤先生
タイトル	Fw:Fw:Fw:Fw:Fw:ハッピーメール
このメールは呪われています。このメールが届いたあなたは、3日以内に確実に死にます。怖いようだけど、本当の話です。実際に私の友人も嘘だと思っていたら突然死んじゃいました。だから、そんな嫌な思いをさせたくないから、たった一つの助かる道を教えます。3日以内にこのメールを5人の友達に送って下さい。それだけです。それだけであなたは助かるし、周りの人も悲しい思いをしなくてすむのです。	

チェーンメール B

あて先	齋藤先生
タイトル	Fw:Fw:Fw:Fw:Fw:大切なお願い
献血のお願い 今、〇〇病院では、O型の血液とA型の血液が不足しています。このままでは大きな事故	

があるとかがをした人は助からないかもしれません。そこで、あなたの思いやりを少しだけ分けて欲しいのです。ぜひ、献血をして下さい！時間は10分程度しかかかりません。お友達や周りの人にも声をかけ、なるべく多くの人と一緒にお願いします。

また、この案内をできるだけ多くの方にお知らせしたいと思っていますので、5人くらいの方にこのメールを送って頂きたいと思います。たくさんの方から献血をして頂くと、それだけで何人もの命が救えるのです。みんなでこの〇〇町を安全に暮らせる町にしましょう。よろしくお願いします。

※児童に提示する際には、〇〇病院の中に地域に実際にある病院名を入れた。

(6) 児童の反応

- 〇たくさんの意見の広がりが見られた。
- 〇チェーンメールBを読んだ後の反応は、
 - ・すぐには出さない。
 - ・献血は良いことなのでどうしよう。
 - ・問い合わせの電話をしてみよう。



となった。意見が出た後で少しだけ話し合いをしたが、「電話をしてみよう」という結論に至った。

実は、このチェーンメールBは実際にあった話を基にして自作した。

実際には、(今回のまとめと同じように)問い合わせの電話で、病院の電話回線がパンクしてしまい、業務に支障が生じた……ということである。

〇チェーンメールそのものを知らない児童がほとんどだったので、チェーンメールについての知識を得ることができた。

〇感想を書く際に「思いやり」という言葉を入れさせたことで、再度「思いやり」について考えることができた。

〇資料を「担任に来た“不幸の手紙”」と設定したため、リアルにとらえることができていた。

- 〇授業では、
- ・友達に対する思いやり
 - ・教師に対する思いやり

この2つの側面から意見交流が行われた。「先生に死なれては困る」でも、「友達に送るのも躊躇われる……」。

4 まとめ

(1) ウェビング図の活用 (図1)

ウェビング図を使用したことで以下の効果を生んだ。なお、本学級ではウェビング図を普段から活用しており、使い方には慣れていた。

- ・自分の考えを文ではなく、キーワードで蜘蛛の巣状に図化していくことで、連想を拡散させていくことができた。
- ・図化することで、自分の考えをまとめることができた。
- ・友達の考えを視覚的に捉えることができた。
- ・黒板を見ながら話し合いをすることができた。
- ・一つの考え方には色々な側面があるということを知ることができた。
- ・友達の考えはみんな違うということも知ることができた。

(2) 保護者の反応

授業後には、学級通信に授業内容を書き、家でも話題にしてもらうようにした。保護者からは、「これから必要になってくるので、良かった」といった意見や、「今まで考えたことが無いようだったので、良い機会になった」といった意見を頂いた。

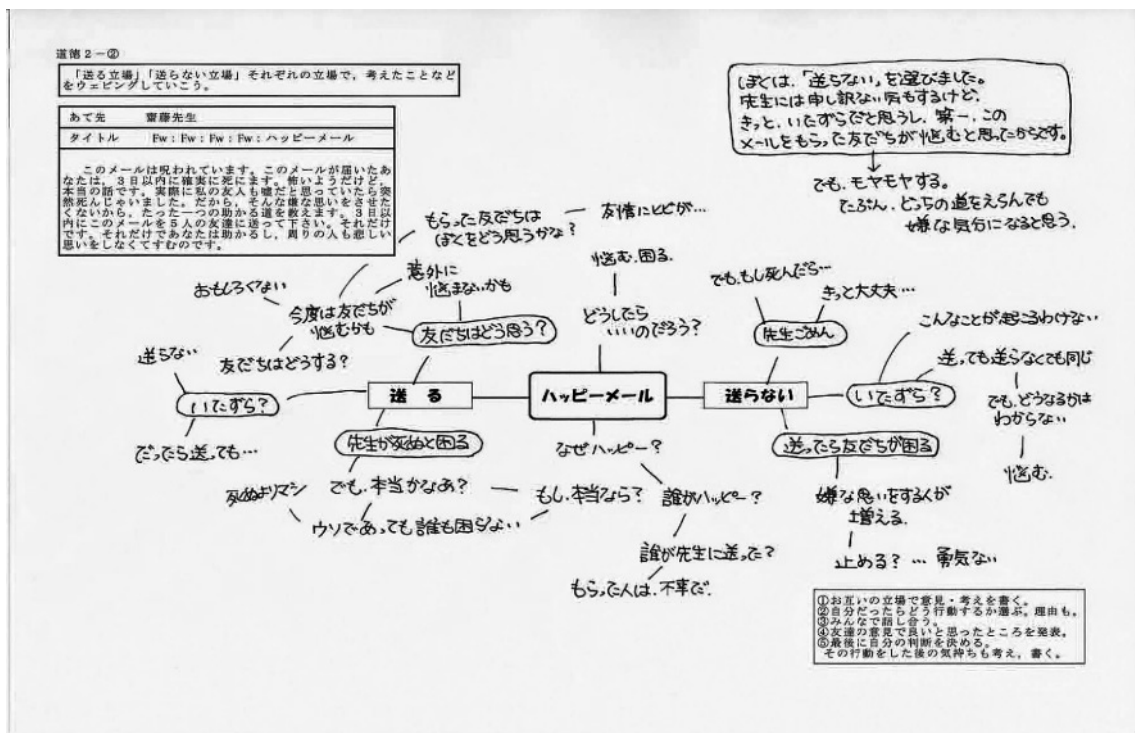
5 おわりに

(1) 心に響く道徳授業の調査

22年春、私は現任校に異動になった。そこで、

- 思いやりと思って行っても相手は嫌なこともあるから、考えて行う。
- 思いやりをすることを勉強して、思いやりをすると相手も自分も良い気持ちになるから、6年生になってもいろいろな人に思いやりや親切をすることができた。
- 人の気持ちを考えて行動できるようになったと思います。
- 相手のことをきちんと考えて、思いやりや親切ができるようになった。

一方、授業をすることで、こういうこともあるんだよと結果的に情報を与えることにもなっていて、それが将来抑止力として働く可能性を期待したい。だからこそ、実態をしっかりと把握し、発達段階に十分配慮して行う必要があると思う。また、情報の諸問題は、道徳的価値とかかわりあって多岐にわたっている。これから色々な所にアンテナを張って、積極的に授業化していきたいと思っている。



体験を生かして ～クリーン活動が変わった～

千葉県習志野市立谷津南小学校教諭 松田 憲子

5月30日はゴミゼロ運動の日。その日と関連させて地域のクリーン活動を行っている学校も多いのではないだろうか。今回はそのクリーン活動という体験と道徳を関連させ、子どもたちの「地域のために自分たちができることをしたい」という気持ちを高めたいと願った。

導入は道徳「自然を再生する人の輪」

NHKの高学年向け道徳番組で、ホームページから視聴できる『道徳ドキュメント』から、「自然を再生する人の輪」でスタート。霞ヶ浦に自然を取り戻そうと活動を続ける人の姿を追ったものである。その主人公が協力を求めた「人の輪」の中に小学生がいた。小学生が、自然を取り戻す大きな力となっていたことから、自分たちも地域の自然を守りたいという気持ちが芽生えた。

本校のすぐ隣には、ラムサール条約に登録されている谷津干潟があり、たくさんの生き物が生息している。番組を通してその干潟も危機にあることに気づいた子どもたちは、「谷津干潟のゴミ拾いなどできることを少しずつやっていきたい。」「自然を守る活動から人の輪が生まれることは初めて知った。私も人と人との関わりを大切に自然を大切にしていきたい。」のような感想をもち、クリーン活動の場所を干潟に決めた。

クリーン活動が変わった

数日後、干潟の遊歩道のゴミ拾いをした。子どもたちは、植え込みの陰や側溝の溝までのぞきこみ、一つもゴミを残すまいと取り組んでいた。他のクラスよりも意欲的な姿に驚いた。また、地域の人とすれ違うたび、大きな声で挨拶する姿も見られた。挨拶すると褒められることが多く、ますます熱心に取り組んだ。

「思ったよりもゴミがあって、干潟の生き物がだんだん減ってしまうと思った。またきれいにしたい。」「たくさんの人と挨拶できて、とても気持ちが良かった。みんなで干潟を大切にしたい。」自然を守ろうとする気持ち、また自分たちも干潟の周囲の人の輪の中にいるという思いが高まった。

道徳で子どもたちの行動が変わったのである。

地域で自然を守り続けている人のお話を聞く

実は谷津干潟は、数十年前はまるでゴミ捨て場のようなだった。地域と協力しながら干潟をきれいにする活動を20年以上してきた方に話を伺った。「今もゴミはあったのに、昔はもっとひどかったなんて想像できない。いろいろな人が協力してあそこまで戻ったんだな。ほくも協力したい。」この授業で自分たちが干潟を守っていこうとする気持ちが共有され、その思いはさらに高まった。

6年資料「富士山を守る」で広げる

6年「富士山を守る」を最後に位置づけた。自分たちの体験や学びから、日本の自然を守る取り組みや今後も環境を保護する活動に関わっていこうとする意欲を育てたいと考えた。本資料だけでなく、体験と重ねて取り組んだことで子どもたちは次のような感想をもつことができた。

「僕はこれらかもボランティアや清掃活動を続けて自然を守りたい。一人では難しくても、協力することで大きな力になると思った。」「谷津干潟も富士山もみんな同じだ。自然を壊すのはすぐだけれど元に戻すのはたくさんの人と時間がかかる。一人ひとりが責任をもって守ることが大切だ。」

実践を振り返って

道徳と体験を結びつけたことで、子どもたちの意欲や行動に大きな変化がみられた。やらされる活動から「自分たちが進んで自然を守る活動」へと意識が変わったことによるものである。

道徳で動機づけや意識づけを行い、体験を通して実感させると自分のこととして考えやすくなる。子どもの行動が変わる。

今回は「富士山を守る」を最後に位置づけたが、はじめにきっかけとして実施するプログラムでもよい。



「人間関係づくりの演習と道徳②」

～「協力する活動」と道徳授業を組み合わせ～

千葉県市原市立白金小学校校長 土田 雄一

4年生の重点主題に「みんなのために何ができるか」がある。「22 祭りの日」「23 仲間がいるから」「24 協力調査隊」の3資料によって構成され、協力の意義を知り、自分たちの心の中に協力の心と力を実感することをねらいとしている。

集団の一員として、周囲とコミュニケーションを取り、折り合いをつけて（合意形成をして）目標に向かって、力を合わせて活動する力こそ、社会で生きる力である。

今回は、協力することの楽しさと難しさを実感する人間関係づくりの演習を紹介する。

協力を実感する「みんなでホールインワン」

この演習はやってみると意外とむずかしくおもしろい。自分一人ではできない。他のメンバーとの協力・サポートが不可欠な演習である。

1 ねらい

ピンポン球をねらったホールにコントロールすることで、協力する力を育てる。

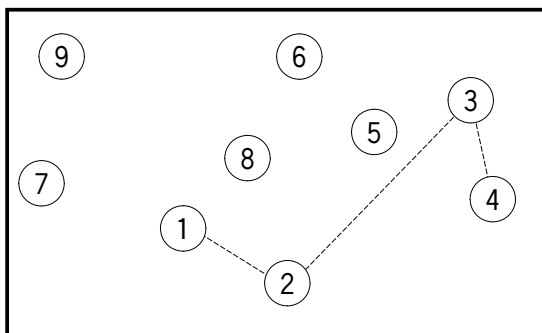
2 やりかた（4人1グループ程度）

新聞広告などで作った、穴が9つあいた「みんなでホールインワン」シート（図）とピンポン球を用意する。（穴の大きさは十円玉程度）

シートの縁を4人で持ち、ピンポン球を1番ホール→2番ホール……と順番に穴へ入れる演習である。途中で球がシートの外に出たら、1つ前のホールに球を置いて再開する（4番ホールをめざしていたときに落ちたら、3番ホールに球を置いて再開）。9ホール回るまでかかった時間を競う演習である。

※ルールとしてシートを持つ手は移動させてよいが、球に触れてはいけないことを確認する。

「みんなでホールインワン」のコースシート（例）



タイムを縮めるためにはどうしたらよいか話し合ったり、声をかけあったりする等の活動があるので、協力する意識が高まる。



「自分たちでコースを創る」活動のすすめ

発展として「自分たちでコースを創ろう」と投げかけると協力する活動がさらに充実する。

4年生では「〇〇県一周コース」や「日本一周」のほか、「人体一周（口→胃等）」など、特色のあるコースプランをグループごとに話し合い、合意形成しながら楽しく活動する姿がみられた。

道徳の時間と関連させる

前述の重点主題「みんなのために何ができるか」と関連させて実施すれば、ねらいに「実感をもって」せまることができる。その他の学年でも「協力」を主題としたものであれば、関連した活動として活用できる。この際、作業の途中での振り返りや道徳授業での体験の振り返りを意図的に行うとより効果的である。

※参考文献：生井久恵「みんなでホールインワン」土田雄一編著『100円グッズで授業づくり』（図書文化）

授業参観におすすめの道徳授業

～中学年はやっぱり『自主・自立』～

岐阜大学教育学部附属小学校教諭 竹井 秀文

1 自立と資料「太郎のいどう教室」

中学年で授業参観におすすめといわれると、私は、すぐに「太郎のいどう教室」とこたえる。

それは、この授業によって、子どもたちがひとり立ちしようとする前向きな姿が見られるからである。

中学年の児童は、低学年のときと違い、自主・自立的に学校生活を送ろうとする姿がでてくる。

つまり、なんでも自分から進んで行動することができる時期である。それはまるで、自転車の補助輪をはずし、大人が荷台をもって補助しながらも、ふらふらと乗れるようになっている状態である。大人がいないと転んでしまう状態であるものの、自分でなんとかしたい、がんばりたいという自立の芽がぐんぐんと伸びるときである。

この「自分から」というやる気を、授業参観で見せることは、学校生活のみならず家庭生活をも変容させるものとなるだろう。大げさな言い方かもしれないが、この資料にはそれほどの力がある。

さて、資料について述べたい。この資料の最大の魅力は、太郎の変容にある。

あらすじは、以下の通りである。

太郎の部屋はいつもちらかっていた。ほとんど毎日、母が掃除をするが、すぐにちらかして、ほかの部屋へ移るために「太郎のいどう教室」と言われていた。ある日、宿題のプリントをなくしてしまう。結局、宿題のプリントも母が見つけるが、どうしていっしょに探してくれなかったと文句を言ってしまう。その会話を聞いていた父親が「それはちがう」と太郎に声をかける。その言葉から、自分の生活を振り返り、自分から部屋の掃除をはじめ。そんな太郎の姿を見て、母がはげましてくれる。太郎は母親に謝って、本棚の整理もはじめた。

子どもたちにとって、整理整頓は、他律的なものからスタートする。今もなお、他律的なものかもしれない。その他律的なとらえを自律的なとらえに変容させる授業参観を展開する。

そもそも整理整頓は、人間らしい快適な生活をするために必要不可欠な要素である。なぜなら、整理整頓とは、物がきちんと片づけられているというだけではなく、自分の行動を自主的なものにする姿の現れだからである。整理整頓を自律的なものにするには、整理整頓が自分からできたわけやできなかったのを思い起こし、自分の生活を見直すことが大切である。

つまり、今の自分の生活をよく考え見つめ直し、自分から進んで整理整頓をする姿が求められるのである。そして、自律した整理整頓を継続することで、自立した整理整頓になることを展望させる必要もある。

整理整頓という自分を高めようとする自主的な行動の積み重ねによって、少しずつ節度ある生活の重要性が理解され、生活習慣を身につけた生き方ができるのである。

2 指導案について

主題名「いつもきちんと」として、ねらい、展開は以下のようにした。

太郎のいどう教室

1-(1)

節度・節制、自立+思慮

(1)主題のねらい

◎整理整頓の大切さを知り、自分から生活を整えていこうとする。

*整理整頓は、快適な生活のための身につけたい基本的な生活習慣であることに気づく。

*整理整頓は、自主的な行動の積み重ねによって、身につけていく生活習慣であることがわかる。

*整理整頓を見直し、自分から進んで生活習慣を身につけていこうとする。

(2)展開 (例)

主な学習活動	指導の方法	子どもの心と力の高まり
1 「いつもきちんと」について考える。 ・「いつもきちんと」の後に続く言葉を考える。 ・その言葉を選んだ理由も考える。	●「いつもきちんと……」の後に続く言葉を交流させ、「整理整頓」への考え方をひろげさせる。 ●どうしてその言葉にしたのかを交流させる。	○いつもきちんと……。なんだろう。 ○いつもきちんと生活をする。 ○いつもきちんと整理する。 ○いつもきちんとやりたいと思っているけど、なかなかできないな。 ○どうしたら、いつもきちんとできるかな。不思議だな。 ○いつもきちんとできるようになりたいな。
2 「太郎のいどう教室」を読み、太郎の変容を通して「整理整頓」について考える。 ・何が心にひっかかったのかを話し合う。 ・太郎が「いどう教室」と言われないようにした理由を考える。	●「整理整頓の秘訣」という観点をもって資料を読ませる。 ●太郎の心にひっかかったものが他律的な整理整頓であることをつかませる。 〈発問〉 太郎くんは何が心にひっかかったのだろう。 ●太郎が自分から「整理整頓」を始めた理由を考えさせる。 〈発問〉 どうして太郎くんは、自分から整理しはじめたのだろう。	○整理整頓は、自分でやらないといけないな。 ○整理整頓は、自分でできることではないかな。 ○自分のことをお母さんのせいにしてはいけないな。 ○自分ができることは、自分でやらないと。 ○自分のことなのに、お母さんにも迷惑かけていたな。あやまるう。 ○整理整頓は、自分の心を整理することなんだな。
3 「太郎のいどう教室」のお話のつづきを書いて、交流する。	●自主的な整理整頓を継続し、自律した整理整頓になったことをつかませる。	○(例)「太郎のいどう教室」はなくなり、太郎はいつも自分から進んで整理整頓ができるようになりました。そして、自分のできることは自分から進んで行動するようになりました。さすが3年生です。
4 これからの生活で整理整頓を進んでするよさとその秘訣を考える。 ・「いつもきちんと」の前後に付ける言葉を考える。	●「□をいつもきちんと……」というキーワードをつくり、今後の生活につなげるようにする。	○自分の生活をいつもきちんと整えて、自分を輝かせるぞ!!

C：気づいて、どうしようと迷う。
 T：おっ、迷いがでた。
 C：迷って、自分から行動する。
 C：そうしたら、ほめられてうれしくなる。
 C：うれしいと、やる気がでる。
 C：そのやる気が、自分まかせをささえる。
 C：その繰り返しで、きれいな心になる。
 C：最後は、当たり前になる。そうやって大人になる。(子どもも保護者も笑い)
 T：すごい。そうやって立派な大人になるのか。
 T：ところで、今みんなはどのへんかな。
 C：このへんかな。(黒板を思い思いに指し示す)



C：この続き、書きたい。(プリントの記入欄……「太郎のいどう教室は」の続きを書く)
 T：じゃあ、最後に書いたことを発表してもらおう。まだ声を聞いていない子に聞きたいな。(3分程度でプリントに記入する)
 C：太郎のいどう教室は、なくなりました。自分から整理整頓を続けて、当たり前になったのです。こうして、自分からなんでもできる人になりました。(教室を拍手が包みこむ)
 C：先生、太郎のいどう教室を変えていいかな。
 C：変えたい、変えたい。
 T：どう変えるの。
 C：太郎の心がきれいな教室。
 C：太郎の自分からピカピカ教室
 など、自分の言葉で資料名をつくりかえて、楽しく授業が終わった。

4 保護者の感想

授業の終わりに日直が感想を言って、あいさつをした。その内容が面白かった。

今日は、自分でやる整理整頓が大切なことがわかりました。でも、私はまだ子どもなので、人まかせな時があります。お母さんからよくしられます。今日の勉強でよくわかったことは「失敗は大切」ということです。たくさん失敗をして、いつか自分まかせで行動できる人になりたいです。

このように、中学年では自分を見つめ、自分にできることは何かを考えさせる授業を見せることができれば十分だろう。それは、低学年のときと違う成長を見せることになるからである。この成長した姿こそ、中学年らしい自主的な姿であり、自立していこうとする高みに向かう姿である。

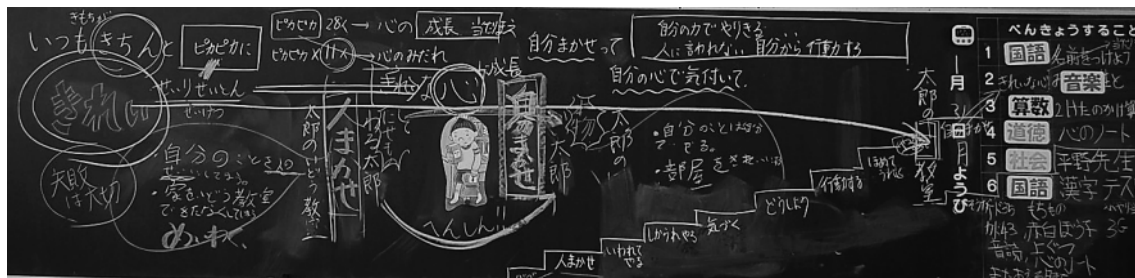
授業参観において、子どもたちが自立していこうとする姿を見せることができれば、保護者も思わず笑みがこぼれる。学級全体に自然な笑顔があふれる道徳の授業(授業参観)は、意義深い。

保護者から次のような感想をいただいた。

今日の授業は、目から鱗でした。今まで私の受けた授業は、「どんな気持ちですか」と先生の質問に答えるのに必死だったように思います。

でも、今日の子どもたちは、自分が言いたいことをのびのびと発言し、お友だちとの発言を結び付けて、自分たちでつくっていった授業でした。まさに自立した授業だったように思いました。A子の姿も、2年生の時と違い、自主的に授業に参加していました。太郎の違いから、自分の生活を見つめ直していました。さっそく、家に帰ると自分の机の上を整理していました。自立した姿がどんどん増えることを期待しています。楽しい授業参観ありがとうございました。

授業参観こそ、やっぱり道徳の授業を。子どもの成長が見える道徳の授業は、親を成長させる。親を成長させる道徳の授業は、子どもを成長させる。それは、教師も成長することになる。この3者が、成長し続けようとする道徳の授業は、授業参観に適合する。授業参観では、笑顔あふれる道徳の授業をどんどん公開してほしい。



道徳ノートの活用 パート 2

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

1. ノート活用の3要素

パート1で、ノートを使う目的は「練習・確認・思考」の3つがあるとお伝えした。今回はその続きである。

2. インプットとアウトプット

学習の特質のひとつに、書いて学ぶという要素がある。書くことによって思考が整理され、理解が促進されるのである。

情報をインプットしただけでは理解したとは言えない。目で見て耳で聴くことによって手に入れた情報を、頭の中で整理し、口や手で言葉に（アウトプット）して、はじめて「わかった」ということになる。

道徳というと、形のない学習という意識が強く、他教科のような段階を踏んだ指導とか、実験・観察を経た学習というイメージとは重なりにくいようである。しかし、心という実体のないものを考えるからこそ、きちんと自分の言葉や図を使って、形にする必要はあるまいか。そのようなアウトプットをすることによって、考える練習を促進することができる。

本稿では、私の担任する6年生、YKさんのノートを通して、子どもたちがいかに練習をくり返し、確認を通して定着させ、思考を深めていくかを考察したい。

3. 練習・確認・思考

(1) 練習

低学年の頃から次のような練習をしてきた。

① 1ページにまとめる練習

本時の学習で大切だと思った言葉や板書を写し、そこに自分の考えを書かせて、ノート1ページにまとめて提出させる。

② 考え（感想）を書く練習

感想には、自分がいいなと感じたこと、友だ

ちの意見でなるほどと思ったこと、これからの自分の生活に生かしたいと思ったことを書くように指示する。

③ 時間をかけて工夫し、まとめる練習

色や図表、記号など、自分の考えやすい方法を自分で工夫し、友だちと違ったノートを考案できるようにする。そのために、土日をまたいで翌週の月曜日にノート提出をするようにした。

④ 友だちの書き方から学ぶ

これはと思った道徳ノートの記述をコピーして配布したり、通信に載せたり、友だち同士回覧してコメントを書かせたりした。その結果、友だちの方法を取り入れて改良し、グレードアップさせること



ができるようになった。上の写真はYKさんが道徳ノートに描いた『階段』である。これもクラスメイトと共にアイデアを出し合ううちにできあがってきたものである。

(2) 確認

① 書いて確認

自分の考えをノートに書き、形として残すことで、自分の考えを整理することができるだけでなく、新たな発想を生みきっかけとすることができる。

②家族で確認

土日ははさむため、家庭での取り組みとリンクさせることができる。例えば、ノートをもとに家で家族と話し合い、その結果を書くこともできる。保護者が書いてくださる場合もある。家族一丸となって、学校での道徳学習を追体験することができるのである。

(3) 思考

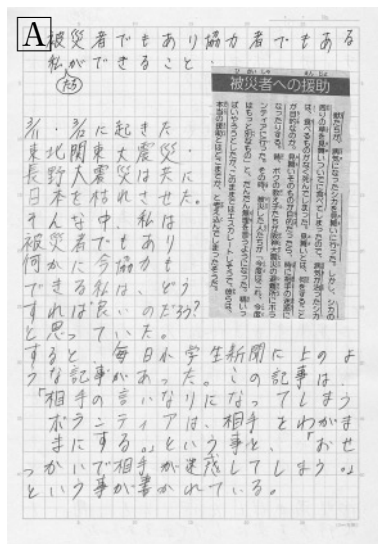
①体験を通して実感する

思考には、授業内で気づき深めるものと、授業後の体験を通して意味づけ、実感するものがある。ノートに記録しておくことで、授業後に「ああ、授業で思ったことはこういうことだったんだ」と実感することができる。

②意識の連続性

毎回の授業を記録しておくことで、積み上げが明確になる。そのため、一時間では到達し得なかったところに、数時間の授業を経て到達することがある。週一時間の授業をもとに単元として生かす発想があるが、そのタイプの学習に対しても効果は大きい。

4. YKさんの道徳ノートの「深化」



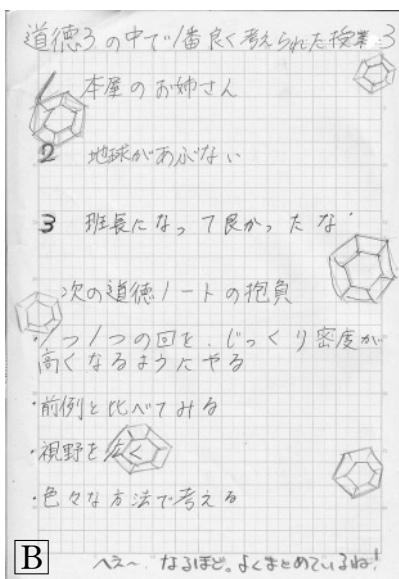
ここではYKさんにスポットを当て、どのような道徳ノートの取り組みをして、意識を変容させていっているかを見てみたい。

Ⓐは新聞記事をもとに問題意識を喚起させている例である。授業

で取り上げた話題につなげて、時事問題を取り上げ、話題を広げているのである。

次にⒷであるが、これは道徳ノートの最後のページに書かれていたものである。彼女にとって6年生になってから3冊目のノートであるが、この

ノートの中にまとめられている授業の中からベスト3を決めているのである。その基準は、自分自

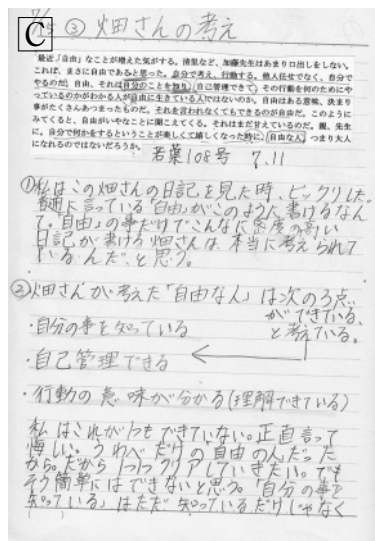


身がよく考えられ、新たな気づきを得ることができたということが大きいようである。加えて、『次の道徳ノートの抱負』まで書いてある。その取り組みに対する意欲、意気込みが

感じられる。

最後に道徳ノート以外の「ノート」への「進化」である。Ⓒは道徳ノートではない。自分用の自由ノートである。以前私は、

「自由」をテーマに自分の考えを書いたHさんの日記を通信に載せ、全員に配布したことがある。それをコピーして貼り、それに対する自分自身の考えを6ページにもわたって書き記しているのである。Hさんの気づきや思考に対する敬意の念から、それをきっかけにして自分自身の「自由」に対する考えがどのように展開したかをまとめている。



これこそ本当の自学自習ノートであろう。ノートはかように様々な可能性を秘めており、使い方次第で子どもの力を大きく引き延ばしてくれるものなのである。